アルコール依存症と家族

「社会の意識」を変えることで、
早期発見・早期回復を！

猪野亜朗

出口のない「闇」の深さ

- 生命にかかわる病気
  - —聞こえてくる訃報の多さ
  - —増えていく心の中の「墓」の多さ
- 否認の病気
  - —何故、死んで行くかも分からず死んでいく人々
  - —自ら治療につながらない人々
  - —個人の否認を強化する社会の意識にある偏見・誤解
- 家族の苦悩の深さ
  - —地獄である
  - —家族だけで対処することの大変さ！
- 進まぬ連携
  - —精神科医からも、見捨てられる人々

悲しみの「闇」の底にあるもの

- それは「社会の意識」の中にある
  アルコール依存症への偏見・誤解である

アルコール依存症への偏見・誤解

- アルコール依存症者に対して

意志が弱い！　酒好き！
大酒飲み！　アル中！
酒癖が悪い！　だらしない！
人格の欠陥！

- アルコール依存症は、長期多量飲酒をすれば誰にでも生じ得る、アルコールの急性・慢性の影響による脳の変化の「疾患」である
- それを人格的特徴、その人固有の特徴として、人格否定、人格非難をする「社会の意識」がある

アルコール依存症への正しい理解 1

アルコールは苦痛の軽減を生ずるため、依存しやすい

- アルコールは、快楽をもたらす報酬だけではなく、苦痛の軽減という報酬をもたらし、ストレスへの対処行動としてアルコールへの依存を生じていく

「Khantzian EJ,Albanese MJ：人はなぜ依存症になるのかー自己治療としてのアディクションー, 松本俊彦訳：星和書店　2013」を一部改変

アルコール依存症への正しい理解 2

アルコールによる急性の脳への影響

- 自身と家族など周囲の人へ苦痛をもたらす「酩酊」
- 「酩酊」は、知覚・運動・思考・判断・遂行・記憶・情動制御の能力を低下させ、客観的「現実」を見えなくさせる
- そのため、アルコール依存症は「否認の病気」とされる
- 否認による本人の現実への気づきの遅れは、家族を苦しめ、本人を不幸に追いやり、さらなる飲酒へと駆り立てる